

南浦和中だより

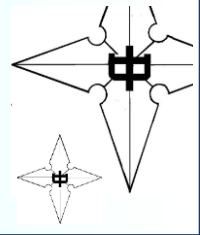
〒336-0026 さいたま市南区辻 6-1-33

TEL 048(863)0753

FAX 048(836)1589

さわやか相談室直通

TEL 048(837)5909



『これが私の生きる道』

校長 おお こう うち のり かず 大河内 範一

栃木県の焼き物といえば「益子焼」。厚みがあり、素朴で温かみのある器が特徴だ。年に2度開かれる「陶器市」には、多くの焼き物好きが集まってくる。今年の秋、久しぶりに陶器市を訪れ、懐かしい友人と再会してきた。

彼の名は、後藤義国。高校時代の同級生で、今では益子町で活躍する陶芸作家だ。インターネットで検索すれば、すぐに作品が見つかる人気の作家になっている。

高校時代、彼は野球部に所属していた。豚（ぶた）や馬（うま）のようなパワーを持ち、練習中は「ウィー！」と叫びながらチームを鼓舞していたところから、「ぶまういー」という謎のあだ名がついた。また、体育がソフトボールだった日には、プロ野球選手のモノマネを延々と披露していた記憶がある。そういえば、吉田拓郎のカセットテープを貸してくれた。私が一時期、吉田拓郎を聴いていたのも彼の影響だった。

高校3年の冬、我々は大学受験に失敗し、浪人生活に突入した。そして翌年も二人そろって全滅。私は二浪の道を選んだが、彼は「受験はもういい。陶芸家になる」と言い残し栃木へ旅立っていった。思いもよらぬ決断に受験の神様も驚いていたと思う。

後々になって読んだ、彼へのインタビュー記事によると、浪人中に観たドラマの登場人物が、焼き物をしながら田舎で暮らしていたという。その姿に憧れ、自分も手仕事をしながら田舎で暮らそうと決めたそうだ。ドラマの影響、恐るべしである。

陶芸の世界にも修行がある。彼は窯元（焼き物を作る場所や主人）で約7年間を過ごし、28歳でようやく独立した。それでも益子では若いほうの独立だったという。陶芸で食べていけるようになるまでには、相当な苦労があったようだ。

彼の作風は白一色の器が中心で、和と洋の要素を兼ね備え、温かみがある。日常使いができる器であることを大切にし、価格も手頃に抑えている。とにかく優しいコンセプト、優しい男なのだ。「売れない頃は、どうすれば売れるか考えていたけれど、結局は自分がいいと思う物がいい」という境地に至ったという。「使う人が料理を楽しみ、季節の食材を盛ったときに美しいと感じてもらえたら冥利に尽きる。器を買ったことで料理を楽しもうと思ってもらえたら、なお嬉しい」とも語っている。いい言葉だ。

彼の実家は寿司屋だった。カウンターのある本格的なお店だ。彼が旅立つ頃だったか、「親父に握ってもらってから、好きなだけ食べていいぞ」と言われて招待されたことがある。10代だった私が味わった本物の寿司は、それはそれは美味しかった。そして、友人との別れをちょっぴり寂しく思い、でも誇らしく感じた。

あの頃の笑い声が、今でも器の中に響いている気がする。人生は、いつ、どこで、どう転ぶかわからない。これだから人生はおもしろい。